

民間レベルでの日韓交流になにが必要か

朴 晋雨

1. 日韓の民間交流の深化の難しさ

本日の報告は、専攻とも全然関係なく、また学問的な話でもない。これまでの個人的な経験、日韓交流の経験を踏まえて、自分なりにどういう風に、より深い発展的な交流ができるかということを報告していきたいと思う。まず、「(資料名)日韓友情年 2005 年資料」というのがあるが、これは、研究というよりも交流のネットワークを作ることを申し込んで、トヨタ財団から2年間の研究助成金をもらって、立命館大学の勝村先生という方が研究責任者になって、私が釜山の大学にいたときのメンバーと一緒に、日韓海峡ネットワークというものを作った。その記念事業として、舞鶴で去年の二月に報告したものをベースにして、その後また、自分の経験を補足したものが、民間レベルの日韓交流で何が必要かという今回の私の報告である。

日韓の民間交流というのは、以前に比べて非常に活発に展開されているのは事実だが、にもかかわらず、いくつか難しい問題が残っている。その一つは、周知のように歴史的な問題である。最近、靖国問題や、教科書問題も起ったが、そのたびに反日感情というのが出てくる。これをどのように分析するか、というのはいろいろ議論があるはずだが、たとえば歴史的な問題というのは、日韓関係の交流の深化を妨げる一つの大きな問題であるということができると思う。

もう一つは、南北分断の現実という問題である。分断されている韓半島というのが、日本と韓半島との平和の関係を築くのに非常に障害になっている。日本では、「日本は平和な国なのに、韓国は分断国家である、特に北朝鮮は怖い」という認識がある。それが真の意味での韓半島と日本との未来志向的な関係を築いていくのに重要な障害になっていると思う。もう一つは、政治的な論理が優先しているということである。いくら韓国の大統領と日本の首相が済州島のシェリーのベンチに座って写真を撮ったとしても、やはり、その裏には政治的な論理がいつも優先しているので、真の意味での交流というのは、なか

なか難しいということである。だからどうすればいいか、というと民間のレベルである。政治のレベルではなくて、民間のレベルにおける交流というのを、もっと活発にしていかなければいけないと思うのだが、そのためには、何が必要かということになる。

その話をする前に、これは主に日本の方々に、学者だけじゃなくて、一般人の方々に、私のどちらかといえば、辛い経験というのを、ひとつ紹介してみたいと思う。毎年、八月の最初の日曜日に、対馬ではアリラン祭りが開かれる。このアリラン祭りというのは、朝鮮通信使の行列をそのまま再現するという、対馬で一番大きいお祭りである。その時には、日本全国から観光客がいっぱい集まってくるし、その行列は二時間も続く。私が釜山にいたときに、私の学校の学生たちが、その祭りの行列に参加していたし、私も引率教員として二、三回行った経験がある。そのとき対馬観光協会などと交流をしながら、対馬の方々から私たちに「日本に来る機会を与えるから感謝しなさい」というニュアンスを非常に強く感じたのである。ある意味で優越感のようなものである。例えば、学生たちにも、「韓国にこういう美味しいビールあるの？」などと質問をする。ホームステイをする学生の場合も、非常にいいもてなしをしてもらったと喜んでいる学生もいるが、もう二度と日本に行きたくないという学生もいるはずなのである。どうして、そういうことになるかというと、日本は韓国より豊かな国であると、経済的に先進国であると、そういうこともあるし、また、歴史的には、過去の韓国が植民地であったということがあるはずだと思うが、そのような優越感を持って交流するというのは、真の意味での交流ではないのではないかと感じたのである。

もうひとつはp p 21 福岡自由学校との交流での経験である。これは福岡の市民団体なのだが、2 年ほど前、釜山の海洋大学の先生が招かれて講演に行った。私は応援に行ったが、そのとき講演が終わってから韓国の徴兵制に対して質問が集中した。彼らは韓国の徴兵反対に対して支援をする、サポーター

をするという気持ちを持っていて、暴力では解決できない、という意味で平和運動をする連中なのだ。そういう彼らは平和運動をしながら、韓国は軍事社会じゃないか、だから韓国は恐いんだよ、というような印象が強く感じられたのである。それが日本の軍事化、あるいは日本の歴史的な過去とオーバーラップして、これから韓国と日本は連帯しなければならないとは言っていたが、その中身が問題なのである。私はそのとき講演はしなかったが、フロアで日本人の方々と議論をした。その時、「あなたたちは一度でも、韓国の徴兵制はどうしてできたか、その背景について考えたことがありますか。」ということを行った。「単に、軍隊は大嫌いだよ、暴力では何も解決できないんだよ、ということだけで平和を主張するのであったら、それは空虚だ、むなしい平和じゃないか。」という風な議論をした。とにかく、このような二つの事例から見ても、相互理解というのは大事だと、相互理解ということに基づいて、平等な連帯とか交流をしなければならない、という風に思ったのである。

2. 相互理解を深めるための四つの前提

相互理解のためにはどうしたらいいか、いろいろな考えがあるはずだと思うが、私の場合、歴史認識の問題、文化的な相違性に対する相互理解、地域間交流の拡大、「隣語」に対する関心という、大体4つにまとめてみた。まず歴史認識の問題。私は歴史専攻だが、やはり歴史は大事だと思う。特に最近、若い人たちの歴史認識が問題である。もっとも皆がそうではないと思う。例えば、朝日新聞福岡北九州版に載った日本と韓国の学生たちの交流が、少しは可能性を見せているということが言えると思う。しかし、一部の学生の中には「私には関係ない。」ある人は「習っていません。知りません。」と答えるということをよく聞く。

それは韓国人の学生たちも同じだと思う。韓国の近代史の教育というのは、ナショナリズムすぎて、やりすぎというのが確かにあると思う。私は歴史が専攻で、歴史学科を卒業したけれど、東洋史科目で日本史は4年間にわたって、明治維新史を1時間位しか聴いたことがない。歴史学科の学生がそれくらいだから、他の学科の学生は、明治維新がいつ起きたことなのか、全然知らない学生も大勢いると思う。去年、私が担当する日本近現代という科目に、うち

の大学に交換学生として来ている日本のR大学の社会学3年生の学生が受講していたが、その講座の中間試験でこういう問題を出した。“次の人物と関連する事項を例の中から選んで、その番号を書きなさい。” いろいろ例があったが、彼の答案をみたら、本居宣長と脱亜論、福沢諭吉と尊皇攘夷運動、吉田松陰と国学という風に解答していた。これには大変驚いた。また、水戸学、江戸時代の武士階級の特権、朝鮮との交流の窓口、岩倉使節団などについても、彼は答えられなかった。日本の高校は、歴史の授業時間が、学期が終わる頃には明治維新で終わってしまうということをよく聞くが、教わっていないということで、また或は関係がないということで済む問題ではないと思う。

また、関係がないということと、責任がないということは、確かに違うということを認識しなければならない。なぜならば、都合がいいものは継承したい、都合が悪いものは継承したくないという訳にはいかないのではないだろうか。やはり自分が韓国人であれ、日本人であれ、自分の国に住んでいる以上は、自分が享受しているものは、すべて相続しなければならないはずなのである。

もうひとつは、やはり歴史認識の中で、侵略戦争と植民地支配に対する認識を、きちんと自覚しなければならない。これは日本の歴史をやっている人たちの中からも、よく自覚されていない所があるが、“日本の戦争”と言うと、アメリカとの戦争、あるいは中国との戦争が戦争であり、それ以前の、1937年、あるいは満州事変の1931年以前の日本の戦争は、余り戦争という話に入っていないという問題がある。近代日本の戦争ということは、やはり明治維新以後、ずっと戦争があったと思う。それをぬきにしてはいけない。また、日本の戦前、あるいは戦前・戦後というときに、大体15年戦争だけが、頭の中に入っているという感じがある。これは、靖国神社の議論にも当てはまると思うが、大体、靖国神社と言えば、A級戦犯とか、そういうことばかり議論し、隣国との関係でどういう問題があるかを理解しようとしていない。私が日本にいた時、イタリア人の友達が、「日本の知識人はだめだ」ということを言った。「どうして？」と言ったら、「どうして日本の知識人は、英語はしゃべっても隣の言葉は話せないの？ イタリア人はフランス語とか、ドイツ語とか、知識人はしゃべるよ。」その時、私も恥ずかしくなった。私も中

国語を話せなかったからだ。だから少し勉強して、ひとことぐらいは話せるようになった。とにかく、私が理想的と考えるのは、韓国人と日本人と中国人の三人が、それぞれの言葉をしゃべっても三人でお酒を飲みながら対話ができるように、それが一番理想的だ、というようなことを考えている。韓国語は難しい、韓国語は外国語だという認識を捨てて、隣の親しみを持って、なじみやすい言葉、という気持ちを持っていいと思うが、それは、なかなか難しいということのようだ。

例えば、韓国の大学は、ほとんど90%以上は、日本語や、日本文学、あるいは日本学と関わりのある学科をもっている。しかし、日本では反対である。韓国の若い人たちは、「あいうえお」は、大学生なら大体は知っているはずである。しかし、日本の大学生は、「カナダラ」を知らない人が90%以上いる。そういうことを、どうやって乗り越えるか。今日の私の報告は、日本学なので、この場合は、日本語で話すのは当たり前だが、普通の日本と韓国の交流で、日本語だけで話すというのは問題ではないだろうか。やはり日本人たちに、もっと韓国に関心を持って、韓国語も勉強していただきたいという気持ちで、私はご報告したわけである。

3. 残された問題

しかし、相互理解を深めるためには、それだけで問題が解決するわけではないので、いくつか残された課題があると思う。ひとつは戦後世代が両分化されているという感じがあることである。確かに一方では、記憶を継承しなければならないという考えを持っている若い人たちがいっぱい出てきていると思う。しかし、もう一方では、新しい歴史教科書を作る会とか、石原慎太郎をサポートする若い人たちも出てきている。極端に分けられている、それをどうするか、というのはひとつの大きな問題である。

最近、日本で韓流ブームということがあるが、これは年齢層がちょっと高い。いわゆるおばさん以上の人たちである。20代は関心が無い。チャン・ドンゴンと言えば、誰？ヨン様、誰？という風なことも多いと思う。市民運動とか平和運動と言っても、私も2、3回シンポジウムなどに行ったが、人が大勢集まるのである。市役所や国際会議場の大きなホールを借りて、100人位集まって、まじめに聞いている。

でも、来場者を見たら全部、50代、60代の人ばかり、若い人たちは来ないのである。そして、かれらは参加費3000円を払っているのである。韓国で、そのような市民講座をして、3000ウォンといっても誰も来ない。例えば、「日本は、我々にとって何であるか」という市民講座を釜山の民主公園の協力で、私たち釜山で日本学を専攻する先生たち8人が無料で講座をしたが、誰も来ないのである。私の講座には5人来たが、一番少ない時には2人が来て座っていた。そして民主公園の関係者が3人座っていた。韓国人は来ないのである。日本の場合は、お金を払ってでも来るのに、韓国は「お金もらいませんから、ただでやりますから。」と言っても来ない。そこで、ソウルに来て先生たちに聞くと、ソウルでは、少しは集まるらしい。これは、やはり中央と地方の認識、意識の違いというのがあるかと、みじめな思いをした。

韓流ブームもそうだし、市民団体とか、市民運動でも、いろいろ韓国に対する企画プログラムに参加する若い人が少ないということは、それをどういう風に乗り越えるかという事を、もっと積極的に考え、新しいプログラムを開発しなければいけないのだと思う。そういう一つの例として、去年の8月15日の朝日新聞の特集でも掲載されたが、日本人の学生2人と在日韓国人の学生1人、韓国の釜山からの学生2人、の5人が新聞の特集の座談会の前に、実はフィールドを2回やっている。日本で1回、釜山で1回。日本の場合は豊臣秀吉の県立名護屋城博物館、釜山では、日本人墓地や民主公園でフィールドをしたが、やはり日本の学生たちは民主公園が一番印象的だったらしい。韓国の民主化過程の、漠然と知っていた韓国の民主化過程は、こういうものだと感じたようである。こういうことは相互理解に非常に大事なものである。こういうことは、たまたま朝日新聞がお金を出したからできたのだけど、実際学生が行ったり来たり、泊ったり食べたりすることを、お金の問題を考えていたら、やはり限界がある。

そういうことをやっていながら、私たちはお互い平和と共存の重要性を考えたい。また、平等な連帯ということを築いていかないといけない。民間交流には、そのような問題が残っていると思う。このほかにも、いっぱいあるはずであるから、皆さんのご意見を聴ければ幸いである。

◇ 質疑応答

フロアー（お茶）：さっき、中国の話がでましたけど、私は中国人です。中国の大連から来た留学生です。お願いします。先生の考えを聞きましたけど、面白いと思いました。去年、7月に結構、反日という事がありましたので、そういうことを聞きたいのです。私は、その時ちょうど日本に来ていました。日本のテレビは、中国がどうやって日本人をいじめたか、石を投げたとか、卵を投げたとか、そういうことをたくさん放送していました。私は中国人がそういうことをやったかどうか信じているところもありますが、信じていないところもあります。そのときは国に電話して父母に聞きました。「中国は、今そんなに日本人をいじめましたか？」と。父母は、そういうことは余り知らなかったです。中国の中国テレビは、そういう放送をしたんですけど少ないんです。一言だけ話しました。その後は、小泉さんが靖国神社を参拝しました。こう言ったら恥ずかしいと思いますけど、実は私は国にいたとき、靖国神社のことがあまりはっきりわからなかったです。日本に来たら、みんなが靖国神社のことに敏感に反応していました。その時、気にして少し調べて、そういうことを知りました。一部分の人は「中国で反日教育をやっているかな」と、質問していました。ここで私は、はっきりと言います。そういうことは無いです。実は私は、国で内閣の歴史を勉強したんですけど、反日の教育が無いんです。本当に無いです。歴史の授業は、1895年、清朝末の時代には、中国はものすごく力が弱かったので、いじめられたということを先生たちも皆に教えました。二年間です。中国は自分の国が弱かったので、いじめられました。これからは力と色々な経験をもって、ちゃんと勉強して、そういうことがないように教育をしました。韓国は、そういう教育はどうしていましたか？わからないので、そこが知りたいです。よろしくおねがいします。

司会：反日教育？

フロアー（お茶）：そういうことは、あるかどうかわからないんです。

報告者：反日教育は—— ありましたね。

司会：ありますね。

報告者：私たちのときは、確かに反日教育を受けて育った世代なんだけど、今は、どうかな。但し、マスコミはですね、それは日本も同じだと思いますが、小さい所を大きく報道する場合もある。一面的な所を全部のように伝えるというのは確かにね。ナショナリズムを煽るのは、マスコミの一番いい材料ですからね。それは、まるで全部に当てはまるように伝えるという。

司会：マスコミと政治、政治にとっては、一番。

フロアー（お茶）：韓国人は、みんな小泉さんの靖国参拝については、どう思いますか。

報告者：一般的には反対でしょう。ただ、それを背景とか、その中身を理解しようとする努力はあまりしません、韓国人は。努力をしないで、とにかく嫌だという。それはマスコミでA級戦犯、A級戦犯というから。どうして靖国が嫌なの？だめなの？と聞くと、A級戦犯と

いう風にしか答えないと思いますね、一般人は。そういうことも問題があると思います。

フロアー（お茶）：それは、だいたい中国と同じです。

報告者：うん。そうですね。

司会：先生、いろいろなプログラムを紹介してくれたのですけど、これからも続けますか？出ているようなプロジェクトとか。

報告者：はいはい、東アジア教育文化学会は、これからも平和と人権という主題を持って、一緒に。海峡ネットワークというのは、研究助成金は今年で完了ですが、これからもグローバルネットと一緒にやりましょう。しかし、やっぱりお金がかかりますね。どこでももらわないで、自分のお金で行ったり来たりしたら。

フロアー（お茶）：先生が個人的な経験から、得た例をうかがいましたが、私は日本に留学して、いろんな日本人と交流することがあるのですけど、面白いと思ったのは、韓国にいないせいか、軍事社会であるという、国に対する恐さということに鈍感になる。ある日本人学生、朝鮮史を研究している男の学生なんですが、韓国の大学に語学研修にきたときのことを聞いたのですが、韓国の男の人って二十歳になると軍隊に行って、いってみれば銃の使い方、いってみれば人を殺す練習を二年間する。ある時に市内を、明洞を歩いていたら、男の人に対する恐怖感というか、いざ何かあった場合に、全部銃を撃てるので、それがものすごく恐怖になって、外を歩くのが恐くなって、家に閉じこもった経験があるというのです。

司会：この先生たちも全部（笑）。

フロアー（お茶）：日本には自衛隊がありますけども、それは軍隊か、軍隊じゃないか、いろんな議論があると思うんですけども、例えば最近、日本では自衛隊を軍隊に充てるような有事法案とか、そういう軍事的な膨張ともいわれるようなニュースがあるんですけど、一般の人と話していると、「韓国は軍隊があるのに、何で日本は軍隊作っちゃいけないの？」という風に思ったりするのは、率直な感想だと思うんです。そういえばそうだなあ、って。単純にですね。いろんな背景があるんですけども、それをきちんと話す機会があればいいんですが、なかなかそういう機会がないんですね。そういう意味で、最近日本で自衛隊とか有事法案とかいう流れがあるんですけど、先生ご自身は、自衛隊だとか日本のそういうことをどういう風に思っているか、もうちょっと聞きたい。これは敏感な問題だと思うんですけど、日本人と交流する場合に、参考までに聞かせていただきたいということですね。

報告者：日本の自衛隊のことを考えるときは、やはり韓国の南北分断という現実という問題、また中国の成長、膨張という問題、そういう東アジア全体の安保と関わる問題として考える必要があるんじゃないか、ただ日本が軍事化するというところだけじゃなくて。軍国主義の復活として捉えるということは全然勘違いだと思いますね。東アジア全体の安保、だから、そういう意味では逆に言えば、平和と共存と関わる問題として

考えるべきだとおもいます。

フロアー（お茶）：そうですね、こういう風に民間交流が活発になっている中で、やっぱりベース的にこういう問題があり、併せて混ってしまうと、政治家とか学生など日韓関係に関する勉強をやっている方は、それなりの自分の立場があると思うんですけど、民間交流となると、きちんとした自分の立場を持たない人たちとの交流の中で、こういう問題が出てきたときに、どういう風に話し合っていきたいのかな、と考える。

報告者：最初は、そういうものは少しずつ避けていくことです。どんどん親しくなったときにね。最初からそういう話をしたら難しくなっちゃいますから。

フロアー（淑明）：軍隊を経験する韓国の男性に対する日本人の見方というのは、微妙な形に分かれていますね。世代によって違うといいましょうか。若い世代は、さっき例に挙げられたように、恐いという感じがする場合があるんですけど、だいたい私の日本での経験からすれば、韓国の男性は軍事体験があるからこそ、礼儀正しいとかいう話を本当に真面目によく言うんですよ。そういう話をきくと、どういことだろうか、と。喜んでいいのか、悲しんでいいのか、よくわからない。男性だけでなく、韓国社会全体が、軍国化している。戦争の体験から、そういう部分もあるんじゃないですか、と話が止まって、かなり極端に分かれている感じがした。それを言った人々の中で、世代が上の人からは、昔、日本が軍事化されることに対する用心みtainなものも感じられたし、やはり複雑だったですね。

フロアー（お茶）：もちろん私はそういう体験はないですけど（笑）、世代的なことかというと、父親はそのまさに戦争の中の一兵卒として戦ってきたので、そういう体験はあるわけで、私も疑似体験としてあるわけですよ。直接戦争体験は無いにしても、軍隊の体験は無いにしても、軍隊がどういうものかは、それなりに聞いて知っている。ただ、それを自分の息子には到底伝え得ない。孫に伝えることは、おそらく無い。そういう意味では、世代によって感じる、軍事の感覚と言うのは、日本では、どんどん薄れていっているわけですね。どんどん抽象化していくというか、単なる知識としてのみあって、感覚としては解からなくなっている。そのことに日本人は実は気付いていないということが相当あるんですね。同じようなことは台湾にいても、やはり非常に強く感じている。台湾の場合は、韓国におけるわれわれと同じように大陸からの侵攻に対して非常に敏感です。最近何かありましたけど、常にそういう緊張の中にいるわけですね。それこそアジアの隣国が、そういう緊張の中に日々暮らしているんだということを日本人は全く知らないという。

司会：それはお互い同じなんですね。日本人にとっては戦後の歴史そのものが非常に重いですよね、いろんな面で。軍事とか、それも否定される、否定されなければならぬようなことがある。軍事とか言葉だけ聴いても、感覚的に韓国の人々とは違う、その感覚がありますね。昨日、話に出たことですが、例えば韓国人だったら、日本の歴史は1945年までの日本しかわからない

のですから、戦後日本の社会とかをあまり知らないんですね。ですから、日本人々が、どうしてそんな風に反応するかを普通の日本人の立場から理解しようとする努力がちょっと足りない部分もあると思うんですね。だからそれをお互いにある程度理解しようという努力も必要ではないかという感覚がしますね。授業をして、終わってから学生たちにそういう話をしますね。今までこれについて何も知らなかったような気がします、ということもある。やはり、ひとつ必要なこととして教育問題に関する注意だと思っんですね。でも最近、教育をビデオが全部担当しようとしていますから、それは大きな問題になっていると思います。

フロアー（お茶）：反日の問題にしても、教科書問題にしても、あるいは靖国神社問題にしても、どうしてその問題が生じ続けるのか、常に繰り返して起り続けるのかについて、正確な歴史的な理解に基づいた議論がなされないといけないんですけど、問題が起きると、その時だけは、わっと騒ぐのだけでも、消えたと忘れちゃって、また同じ問題がくると、また同じところから始まるという。特に日本社会では、そういう意味では、大学で教えないということもあるのかもしれませんが、やはりマスコミにそういう役割を期待している以上は、おそらく解決しないだろうという気がします。政治は解決できないだろうし、全く別のスタンスで、お互いに歴史的な意識を共有できた部分で、問題を詰め合うことができるのは今日の朴先生がおっしゃったような形のネットワークというのが非常に有効だと思います

フロアー（お茶）：表面的なことではなく、深いところで理解していくことが重要という話を先生は述べられていたと思うんです。ちょっと個人的な話になってしまうかもしれませんが、私の母が、よく普通に話すんですけど、恐い感じではなくて、自分の国が一番とか、多分純粋に信じて言っているのだと思いますが、私はそれを聞いて、何かわかるんだけど、とっても困ったような気分になるのです。なんか観念主義者みたいになっていますが、絶対的な「自分の国が一番」というような気持ちを超えて互いを理解する、だけど互いを理解するということの矛盾、という大変ですけど、その難しさみたいなものを、母を見て私は感じるんですけど、それはどんな風にすれば、もっとうまくいくようになるか、お考えが聞いてみたいんですけど。

報告者：どういう風に、それを乗り越えられるかということですか？

フロアー（お茶）：はい。

報告者：それは、やはり、母や、おばあさんになると変わらないんですね、こっちで「違いますよ。それはだめです。」と言っても変わらないですから。だから青少年交流というのは大事です。（笑）おばあさんを変えようとしないように。（笑）次世代を変えようとするんです。
司会：それは世代差別です。（笑）おじいさんでしょう、外に出たら私たちも。（笑）

報告者：これは簡単なことは、おれのものが大事だったら、人のものも大事だという風な考え方を持って。うちの

朴 晋雨：民間レベルでの日韓交流になにが必要か

国を愛国すれば、人の国の愛国心も理解してもらえば
いい、ということにもなる。それは非常に簡単なこと

でありながら・・・いってみればね。

パク ジンウ／淑明女子大学校日本学科 助教授